

日本科学哲学会 第55回大会（2022） 大会シンポジウム
「コミュニケーションメディアの哲学」
開催案内

日時：2022/12/3(土) 14:30-17:00

場所：名古屋大学 東山キャンパス IB 電子情報館

登壇者

- オーガナイザー
 - 呉羽真 (山口大学)
- 提題者（50音順）
 - 稲見昌彦 (東京大学)
 - 呉羽真 (山口大学)
 - 松永伸司 (京都大学)
- コメンテーター
 - 村上祐子 (立教大学)
- 司会
 - 藤川直也 (東京大学)

タイムテーブル

● 趣旨説明：	呉羽真	(5分)
● 提題①：	呉羽真 「対面神話を乗り越える——コミュニケーションの再設計に向けて」	(25分)
● 提題②：	松永伸司 「VR とコミュニケーション：技術と慣習の関係の観点から」	(25分)
● 提題③：	稲見昌彦 「自在化身体：認識・行動を支援する人間拡張工学と、新たな身体性の構築に向けて」	(25分)
● 休憩		(10分)
● コメント：	村上祐子、および提題者からのリプライ	(15分)
● 全体ディスカッション		(45分)

企画趣旨

現在、新型コロナウイルス感染症の拡大（コロナ禍）の影響と新しいコミュニケーションメディアの登場により、コミュニケーション形態に大きな変化が生じている。コロナ禍

では対面コミュニケーションの機会が減少するとともにテレビ会議が急速に普及した。同時に、新しいコミュニケーションメディアとしてVR技術や遠隔操作型ロボットの開発が進められ、また新しい活動空間として「メタバース」に注目が集まっている。これらのメディアはコミュニケーションの可能性を広げるものと捉えられる。だが、その一方で、『スマホ脳』という本がベストセラーになり、またコロナ禍で「オンラインコミュニケーションは対面コミュニケーションに劣る」といった言説が流布するなど、メディアの普及と対面コミュニケーションの減少について懸念を抱く人もいる。

こうした状況を受けて、コミュニケーションという現象をどのように捉え直すかは、哲学にとって喫緊の重要な課題である。哲学はコミュニケーションについて盛んに議論を行ってきたが、そこでは対面コミュニケーションがコミュニケーションの典型と捉えられてきた。こうした議論の想定は、世間の傾向を反映するものであるが、私たちのコミュニケーションのかなりの割合がオンラインメディアを介して非対面で行われている現状にそぐわないものとなってきた。そこで本シンポジウムでは、哲学および他の学問分野の知見を交えた議論を通して、上記のようなコミュニケーションの変化と、メディアを介したコミュニケーションについての理解を目指す。この際、統一テーマとして、以下のものを想定している。

- 「テレビ会議、ロボット、VRのようなメディアを介したコミュニケーションは、対面コミュニケーションとどう異なり、またどう関わるか？」
- 「これらのメディアによって変化しつつあるコミュニケーションを理解するために、哲学および他の学問分野はどのような理論・方法を提供できる／必要とするか？」

提題者のうち、呉羽の提題要旨は以下である：提題者は、テレビ会議システムやテレプレゼンスロボットを介したコミュニケーションについて技術哲学および認知科学の哲学の観点から研究を行い、またその中で「オンラインコミュニケーションは対面コミュニケーションに劣る」という言説を「対面神話」と呼んで批判してきた。本提題では、これまでの研究を踏まえつつ、対面神話に詳しい分析を加え、コロナ禍を契機としたコミュニケーション観の刷新の必要性を説く。

松永の提題要旨は以下である：新しい技術がコミュニケーションツールとして使われることを考えたとき、「その技術によって何が新たに可能になるのか」「その技術によってこれまでと何が変わるのか」「その技術ならではのコミュニケーションとは何か」といった問いが自然と浮かぶかもしれない。とはいえ、新しい技術の実際の使われ方は、その技術のポテンシャル・制約に左右されるだけでなく（あるいはそれ以上に）、その使用者たちが共有する既存の慣習にも左右される。この発表では、VR環境でのコミュニケーションのあり方の可能性をいくつか示しながら、何がどう変わるのか（あるいは変わらないのか）を考えるための視点を提供したい。おそらくそれは、わたしたちがいま受け入れている慣習と実践を一步引いて眺める視点にもなるだろう。

稲見の提題要旨は以下である：現在我々は Society4.0 とも位置付けられる情報化社会に

生きている。そして情報化とは脱物質化・脱身体化とも換言できる。情報化により様々なサービスやビジネスが生まれた。今回のコロナ禍であっても、大学や企業において講義や会議を辛うじて行うことができたのも情報化の貢献といえる。しかしながら、現状の遠隔会議システムをはじめとする情報ツールを介したコミュニケーションにおける身体性の喪失により、諸問題が顕在化しつつある。テレグジスタンス技術やアバター技術、触覚技術などは情報化社会に身体性を取り戻す、いわばポスト身体社会を目指した試みともとらえることができる。本講演では、ポスト身体社会における多様な身体性を扱うための研究「自在化身体」について紹介するとともに、Society5.0における「こころ」と「からだ」の新たな関係を展望する。

また、村上は、情報通信技術（ICT）およびオンラインコミュニティについての哲学的研究を行ってきた立場から、各提題へのコメントを行う。

謝辞：本企画は、日立財団 2021 年度（第 53 回）倉田奨励金による研究課題「メディアコミュニケーションのリデザインー〈身体性〉・〈言語〉・〈環境〉に着目した応用哲学的探究」（代表研究者：呉羽真、https://www.hitachi-zaidan.org/topics/data/087_2/topic_s087_2_n1518.pdf）の支援の下に開催されるものです。